

スモーランド地方

(Småland) スウェーデン王国

スモーランドとは、スウェーデン南部の一地方。北欧らしくやせた大地に森林と畑が広がり、氷河の跡に水をたたえた湖も点在する田園地帯だ。この地方には、家具製作やガラス工芸など、「物作り」の伝統が宿っている。共通しているのは、形(フォルム)に力点を置いたスカンディナヴィア・デザインの典型であることだ。1988年の夏、二度目の北欧行きの時、この地を旅した。

まずは首都ストックホルムの中心街の百貨店『オーレンス(Åhlens)』。この「売り」は地階に設けられたガラス・ショップ。これから向かうスモーランドの代表であるコスタ・ボダ(Kosta/Boda)やオレフォス(Orrefors)のクリスタル製品が、天井からのダウンライトで眩(まばゆ)く輝いていた。

ヴェルナモ(Värnamo)にて

さて私の欲張った旅は、この地から鉄道と船でノルウェイのフィヨルド観光などを済ませ、再びスウェーデンのヨーテボリ(Göteborg)に戻り、ローカルな単線を東へとスモーランドに入るプランだった。まずはヴェルナモという小さな駅に降り立つ。

駅前に広がる街は木々が多く、緑園都市と言った風情だ。徒歩で行かれる街の中心には、これも喬木に覆われた「野外博物館」がある。赤銅色の壁と白い枠取りの窓という典型的なスウェーデンの伝統民家が点在し、屋内は工芸の店やカフェなどに利用されていた。実は、北欧はこうした野外博物館発祥の地で、スウェーデンだけでなくフィンランドなどでも見かける。日本の民家園なども、これに倣(なら)ったものだと思う。草を食む子ヤギを家族連れが見守る小動物園も備わり、町民憩いの場にもなっていた。



マットソン作 ハイバックチェアとオットマン

この街を訪ねた目的は、木の椅子をデザインするブルーノ=マットソン氏のショールームを見るためだった。それが、野外博物館の裏手にあった。この夏永眠された氏にはお会いできなかったが、建物自体がモダンな大きな窓をもつ白で統一されたギャラリーに、その作品を見ることができた。この街に大工の息子として生まれたマットソンは、椅子のデザインにこだわり、30歳の頃、熱水をかけて木部を自由に折り曲げる技術を開発した。木の板を重

ね合わせる集成材の技術も加え、体にフィットするデザインを創作した。

日本にも早くに紹介され、山形県の家具製作『天童木工』がその代理となり、広く普及している。そのマットソン・デザインを本場で見たかったというわけだ。実に優美、実に機能的。素材が木だという点は、この緑の町と無関係ではないだろう。一方、将棋の駒で有名な天童市にいつか『木工』を訪ねマットソン・チェアを見たいと思っているが、いまだに実現していない。それにしても北欧の夏は涼しく、歩くのが快い。

「ガラスの王国」へ



コスタの吹きガラスの工程

ヴェルナモからさらに東へ、途中幹線鉄道との乗換駅アルヴェスタを過ぎ、この地方の一中心ヴェクショー(Växjö)に至る。人口6万の地方都市だ。ここで二泊することにして、駅に近い小奇麗なホテルに部屋をとった。翌日はバルト海沿いのカルマル(Kalmar)まで往復するつもりだが、何とか足を確保して途中で点在するガラスの工房を訪ねたい。そこがお国自慢の「ガラスの王国」(Kingdom of Crystal)と呼ばれる地だったから。

客室に備え付けの『イエローページ』を見ると、レンタカー会社の広告が目にとまった。高物価の北欧にしてはそれほど高くない料金だ。受付に下りて、同じ業者のパンフを見つけ、宿の人と相談した。気になる追加料金が moms と書いてある。「これは何ですか」と聞くと、vat(消費税の一種)だと言う。それを何と25%とると言う。ここで一瞬ためらったが、二度と来られないかも知れぬと思うと、心が前に進んだ。翌朝、業者の青年がホテルにボルボ(Volvo)を届けた。「帰りが遅くなりそう」と告げると、駅の駐車場に返し出札に鍵を預ければOKと教えてくれた。さっそく、ドライブに出かけた。

緑の田園を貫く真っ直ぐな道を行く。森の中で不思議な踏み切りに出くわす。こんな所に滑走路への誘導路があり、目の前をジェット戦闘機の機体が横切った。冷戦の中で「武装中立国家」を維持したスウェーデンは米ソ両陣営に加わらず、他国からの軍事介入に力に対抗する道を選んだ。そうした国のあり方が、身近に戦闘機を見出すのだろう。外国に頼らず、その多くが国策会社 Saab 製であることでも有名だ。

途中、木の間越しに湖を見ながら1時間も進むと、コスタの村が見えてきた。アメリカの田舎にきた雰囲気だが、その北側に目ざすコスタ=ボダ社の工場が建っていた。天井の高い体育館のような建物に入り、見学順路に沿いながら吹きガラスの工房を見学する。職人は服装も自由で、ベテランも若手も思い思いに、創作に取り組んでいた。造形の妙に惹かれて近づくと、さすがに炉の熱で暑い。適度な距離をとった。

外に出て、アウトレットの看板が目にとまった。そこで、欲しかった飲み物を入れるピッチャーを手に入れることができた。さらに博物館には、この工房が成立した由来が書いてあった。18世紀、王国は自前の輸出産業を欲しがる重商主義の時代だった。コスタ社は、首都ストックホルムと南部の重要港カールスクロナを結ぶ街道の途中に位置し、好立地だった。またここには豊かな森林があり、炉を維持する薪に困らなかった。初期には、吹きガラスの先輩であるチェコのボヘミアから多くの職人の応援を仰ぎ、多くの技術を学んだ。19世紀末、ストックホルムで開かれた博覧会に出品したところ、デザインが他のヨーロッパの産地の真似と批判される。これを機にオリジナルのデザインを志向することになった。20世紀中頃には、隣村のボダ社と合併し「コスタ・ボダ」と呼ばれるようになった。世界に知られ、日本でも『池袋西武』などが扱う高級ガラス器メーカーとなった。

オレフォスにて



オレフォスのノーベル賞シリーズ

そこから15km東に、もう一つのクリスタル・ガラスの工房、オレフォスがあった。こちらはコスタより近代的な工場で、製造工程を間近に見ることはできず、見学はあっさりとした。しかし、併設された作品のギャラリーは素晴らしかった。装飾に偏りがちな他の工房と比べ、オレフォスのデザインはクリスタルの透明感を意識した無地で着色も控えめのものが多い。それらの作品が、ガラス窓を通して外光をいっぱいを受けたギャラリーに展示され、光り輝いていた。

戦間期から戦中にかけて、シモン=ガーテやニルス=ランドベリーと言ったデザイナーが今も作品として販売しているスマートなゴブレットなどを製作していた。それにしても、40年代にも作品が産み出されたところがすごい。

中立を維持しヨーロッパの戦火に巻き込まれなかった国だからできたことだ。オレフォスの洗練されたデザインは、90年代のコスタ・ボダ社との合併を経てもそのスタイルを貫いている。この間、女性が職場進出し、今やオレフォスの定番となっている『インターメッツォ』シリーズも、エリカという女性デザイナーによるものだ。この工場でも、赤銅色に塗られた外壁と白い窓枠の建物が目立った。晴天の下、その対照が美しかった。そばに、かつては実際に使っていたと思われる水車が、今も水音を立てて回っていた。

カルマル(Kalmar)にて

オレフォスからさらに1時間ほど、バルト海に面するカルマルに達した。この小さな港町の海沿いに、防壁に囲まれたカルマル城が静かに横たわっていた。あいにく閉門直後で中に入れなかったが、海に向かって堤に並ぶ大砲や、城へと渡る跳ね橋がかかる水堀など、歳月を経た構造物を間近に見ることができた。



港に向かい合うカルマル城

14世紀末、波静かな城がざわつく事件があった。当時この地はスコーネと呼ばれ、デンマーク領と接していた。その実質上の君主マルグレーテがスウェーデンとノルウェイを合邦し、同じ君主をいただくカルマル同盟を発足させた。マルグレーテは人並み以上の野心をもって振舞った。そしてスウェーデン内での国王と対立していた貴族と結び、この国を同盟に加えさせた。その後百五十年間、カルマル同盟は北ドイツのハンザ同盟に対抗する勢力として続いた。

晴天の下、堤に並ぶ大砲が向かう海の沖を眺めた。沖合遠くうっすらと地平線が伸びる。地図を見てもその東に細長くエランド(Öland)島が位置している。この島へ橋が架かった今、カルマルは重要拠点である。

さて、帰路はひたすら国道25号をヴェクショーめざし、帰ることになった。遅くまで駅が開いていると知り、もう一度外出した後に戻り、車を返還した。その足ですぐの、市民公園に立ち寄ってみた。きれいに芝生が刈り込まれた明かりのついた夜の公園に、誰だろ銅像が立っていた。碑文を見ると、この地が生んだ植物学者カール・フォン・リンネのそれだった。「おしべ・めしべ」の学者の地と知り、さらに興味を覚えることになった。了